

====今月号は4ページ建て「左顧右眄」のみでお届けします。====

左顧右眄~さこ・うべん~ (53)【第7話「気功」を整理整頓すると!?!】

第5章 ヒンズー教とは？ そして密教とは？

ヒンズー教の影響という点をより具体的に理解していただくために、バラモン教とヒンズー教についてさらには仏教との関連について簡単にその歴史的推移や特徴をまとめて見ました。

1. バラモン教

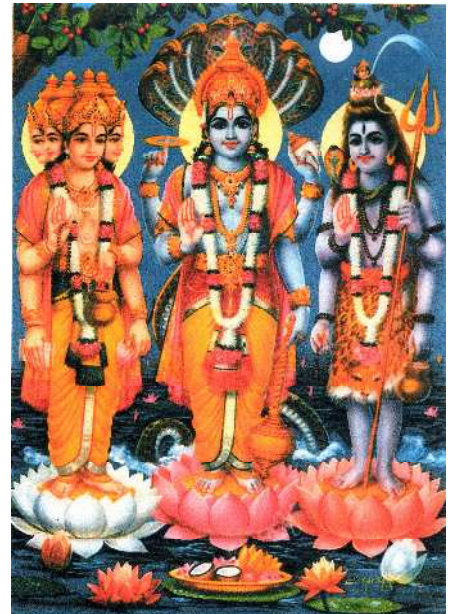
アーリア人によるインド民衆支配のための宗教。カースト制度の頂点にバラモンがあって、絶対神ブラフマーの神託を利用して政治経済を支配しました。輪廻、解脱と言う概念を持ち、四住期と言う生活様式や、身分、職業を差別するカースト制度が特徴です。これに反発して仏教や、ジャイナ教が誕生して一時隆盛になったため、変容を強いられました。

2. ヒンズー教へ変革と仏教の衰退

アーリア人が次第にその支配地域をインド全域に広げてゆく過程で、多岐にわたる被支配民族の民間的な信仰や呪術などを取り込んでますます多神教化することによって紀元後5世紀ぐらいにはヒンズー教として再び仏教を凌ぐようになります。

本来の絶対神**ブラフマー**に、土着信仰の**ヴィシュヌ**神（繁栄と維持）と**シヴァ**神（破壊）とを加えて三神一体という妙手を生み出し、さらにこれらの眷属としてさまざまな土着神を加えることにより全インドのあらゆる人種、階層に受け入れられる国民宗教に変容していったのです。

これ以降、仏教は退勢挽回のためにヒンズー教の神々や密教修法を取り込んで対抗してゆきますが、結局はヒンズー教と習合するような方向となり、かえって独自性を失い、ついには13世紀のインドへのイスラーム勢力の侵攻を期に衰亡してしまいます。現在もその状況は変わらないといわれています。下表にあるとおり密教の根本佛もヒンズー教の根本神を取り込んでいることは明らかです。



三神一体像。左からブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァ。一番人気は中央のヴィシュヌで、次がシヴァ。

ヒンズー教の三根本神と密教の根本佛の対応関係	
ヒンズー教	真言密教
三神一体	三輪身*
ブラフマー 創造神	自性輪身 大日如来
ヴィシュヌ 繁栄維持神	正法輪身 菩薩
シヴァ 破壊神	教令輪身 明王

*さんりんじん；如来は真理の当体（自性）に他ならないので、自性輪身（如来）という。この真理は、衆生を教化救済するために菩薩が化（仮）現し正法を説く。これを正法輪身（菩薩）という。さらにその済度を徹底するために強剛難化の衆生を忿怒（ふんぬ）相をもって折伏する役割が教令輪身（明王）である。

【ウィキペディア辞典より】

3. 密教とは

密教とは本来バラモン教の秘密的な修法そのものを言う概念でした。すなわち宇宙の根本神と一体化するための修法、呪文（真言）を唱える、あるいは印を結ぶなどがそうですが、これによって得た超人的な法力によって、たとえば病気を治すとかいうものです。いわば民間宗教的な側面でもあります。こうした密教の経典などはすでに3世紀ごろには中国にわたってきていたようです。後のものと区別するためにこれをそうみつ雑密（雑部密教）と呼んでいます。

ところでお釈迦様は解脱はしましたが、輪廻や来世思想は否定（いわば無神論）しました。当然ですが密教的な呪術も否定、禁止しています。いわゆる原始仏教は“自利”であり、のちに分裂して発生した大乘仏教は“他利”を主張するものです。前者は現在でもタイなどにあるように信者の出家と修行を前提としますが、後者は日本の浄土宗や日蓮宗などに代表されるように信者はもっぱら他力本願的であり、根本理念からして著しく異なっています。

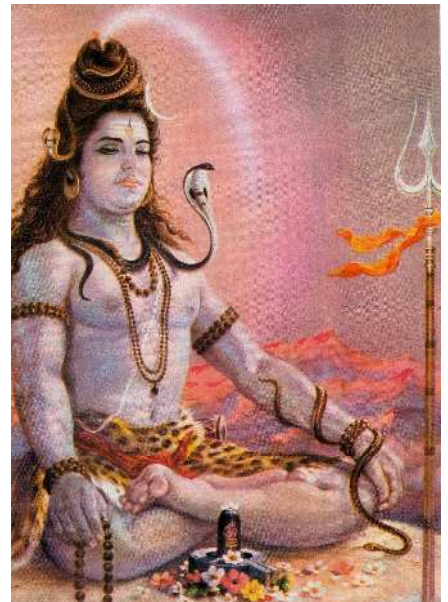
“仏教の”密教は大乘仏教からさらに発展する形で、基本経典たる「大日経」の成立をもって誕生しました。唐の玄宗皇帝の招きでインドから来た善無畏によってはじめて中国語に翻訳されました。

密教の教義や呪法、仏像、神像のほとんどは実はヒンズー教の影響を深く受けていることは、上の表からもお分かりのように、知る人ぞ知ることなのです。真言密教の行法は、曼荼羅の前で、印を結び、真言を唱え、禅定に入れば、大日如来と一体となることが出来る、すなわち“即身成仏”することが出来る、ひいてはその無限のちからを（衆生のために、あるいは国家のために、あるいは自らのために）使うことが出来るというものです。

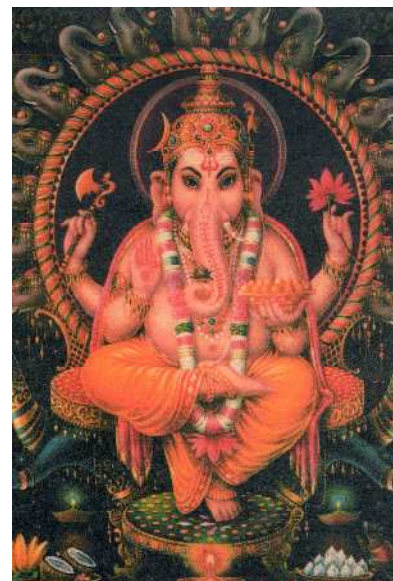
その本尊は基本経典たる「大日経」に由来する「大日如来」であり、また時として、その化身（輪身）である「不動明王」を祀ります。

「大日如来」は、サンスクリット語の「マハー・ヴァイローチ（大きく・あまねく照らすもの）」の意識語であり、またこれを音訳したのが「まかびるしやなぶつ摩訶毘盧遮那佛」（東大寺の大仏がこれです）ですから、どちらも同じものです。これがヒンズー教の絶対神、宇宙の根本神ブラフマーに照応するものであることは上記のとおり明らかです。また「不動明王」はサンスクリット語では「アチャラナータ（不動な守護神）」といい、元来シヴァ神の異名でもあります。そのほかの明王や天部などもすべてヒンズー教の神々そのものですが、仏教側からは、これらのヒンズー教の神々が仏教に帰依して守護神として仏教を護る役割、あるいは須弥山を護る役割、を果たしていると説いています。しかし、インドにおける実態というのは、密教はヒンズー化した佛教であり、そのあげく仏教が衰亡してしまったことは紛れも無い事実なのです。インドから遠い、インドの歴史に無知な日本だからこそ通じていた虚構の説とも言えるものです。

ヒンズー教の神々の密教における照応の例をいくつかご紹介します。まず右上ですが、これがシヴァ神です。コブラを身にまとい、膝元には男女の象徴が置かれている典型的な姿です。右下が不動明王です。炎の光背に剣を持つ典型的な像です。



ヒンズー教の伎芸天サラスヴァディー（漢訳は弁才天）を取り込んだのが有名な弁財天です。（画像は江ノ島の裸弁天。）日本では才を財に変えて、財宝神に変容させたということです。



右上図はいわゆる聖天宮の本尊の聖天ですが、その正体はご覧の通りの象頭のガネーシャ（シヴァ神の息子）そのものか、あるいはその化身の歓喜天（合体像）です。ですから見せられない秘仏なのです。

次はブラフマーとインドラです。バラモン教の絶対神は先にお話したブラフマーですが、それよりも古く、小アジアやメソポタミアなどでもひろく信仰されていたのはインドラです。武神というか魔神という

が相当強烈で個性的な神のようです。この2神も早くから仏教に取り込まれていますが、それらの名前はブラフマーが梵天（左）、インドラが帝釈天（右）です。インドではすっかり人気の落ちたこの2神が日本では高い崇敬を受けているのですからこれもまたなかなか面白いことです。東大寺、法隆寺、東寺(画像)などの梵天、帝釈天一対像が有名ですが、なんと



もわれわれが親しいのは柴又の帝釈天でしょうか。この本尊は

いわゆる板本尊ですが、中国道教由来の庚申信仰*と習合して人気を博しているところがまたじつに日本的なところともいえます。

【庚申信仰とは、元来道教の延命呪法で、平安時代には日本に伝わってきたもの。旧暦の60日ごとに巡ってくる庚申かのえさるの日に夜通し念仏などを唱える信仰。もしその日に眠ってしまうと、体内に住んでいる三匹の「三尸の虫」が抜け出して天にのぼり天帝にその人の悪事や罪科を告げるという。悪事や罪科には一定の点数が決められていて、その累積点数が人間の寿命を縮め、一定の点数に達するとそこで命が絶たれるというもの。各地に庚申堂や庚申社が建てられ、青面金剛（帝釈天のお使い）【左図】、猿田彦、三猿などを祀った。江戸時代はとくに流行したが、道教、密教、修験道、民間信仰などが

ごちゃごちゃに習合した例として知られている。】

シヴァ神の部下で富と財宝の守護神のクペーラ（別名ヴァイシュラヴァーナ）は仏教に取り込まれると四天王の多聞天（意識）と武神の毘沙門天（音訳）になります。

クペーラ

多聞天（東大寺）

毘沙門天（春日山林泉寺所蔵）



ところで、上の多聞天や毘沙門天の服装は兵馬俑の兵士たちの服装にもよく似ていますが、中国の唐時代の武人の軍装を模したものとされています。密教がまず中国で醸成され、それが日本に伝えられ、最終的には空海によって日本の真言密教として成立したことを示す証拠でもあります。

毘沙門天は、インドでも中国でもそうであったように、日本でも北方の守護神、あるいは軍神としてたいへん信奉をあためました。古くは東北の蝦夷を征伐した征夷大將軍・坂上田村麿は毘沙門天の化身とさえ伝えられていますし、鎮撫のための毘沙門堂はいまなお東北のそこここに残っているようです。また上杉謙信の戦旗の「毘」の一文字はもちろん毘沙門天の毘ですし、兜の前立ちには毘沙門天像を付けていたほど、篤く信仰していたことも有名です。

ところで仏像の原点はやはり釈迦そのものを写した釈迦如来像【右図】です。身にまとっているのは粗末な衲衣^{のうえ}だけでほかは何の装飾品も付けていません。衲衣とは便所掃除のときに着る糞掃衣^{ふんそうえ}、あるいは汚物をぬぐうためぐらいにしか使えないぼろ布から作った衣、のことです。この衲衣が時代を経るうちにだんだんときらびやかに発展してきたものが、ときとして、まるで権威や権力や法威の象徴のようにも思える、現代の袈裟です。



わずか3枚の衣と、一椀の鉢と、水をこす薄布以外は何も所有せず、ただただ乞食行^{こじきぎょう}によって日々の最低の糧を得ていたのが、まさに釈迦やその弟子たちの修行と伝道行そのものであったわけです。このような原始仏教と現代の日本の仏教との間には大きな隔絶があるのです。どちらがどうかということは日ごろ無信心な私にはお話出来る資格はありません。しかし、ともあれ仏教というものがこのように大きく変貌してきたことだけはお伝え出来ると思ひまして、この稿をまとめてみました。

気功の歴史を辿っていたら、とんでもないところへ話しが行ってしまいましたが、ユーラシア大陸をめぐる宗教と宗教文化の盛衰と競合と習合と、そして壮大な伝播の物語としてお楽しみいただけたのであれば幸いです。『第7話・「気功」を整理整頓すると！？』はこれで終らせていただきます。